

氏名（本籍）	宋	競	夔	（韓国）
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	博	乙	第	317号
学位授与年月日	昭	和	61年	6月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	哲学・思想研究科			
学位論文題目	李退溪理気哲学の研究			
主査	筑波大学教授	文学博士	高	橋 進
副査	筑波大学教授	文学博士	湯	浅 泰 雄
副査	筑波大学助教授		奈	良 博 順
副査	筑波大学教授	文学博士	長	瀬 守
副査	筑波大学教授	文学博士	内	山 知 也

論 文 の 要 旨

本論文は、李退溪哲学における理気論及び性情論を中心に、特に彼の用いた重要な哲学的概念や語句を網羅的に整理し、これを関連文脈の中で分析精察することにより、その思想的根拠及び所説の妥当性・斉合性を解明し、さらに李退溪哲学の全体を見直してこれを再構成し、その独自性ないし特徴を明かにしようとしたものである。論文全体の構成は、序章に次いで本論を上下二篇（全15章）に分けて論述し、結論を付している。

序章では、研究の目的・意義・方法及び李退溪の生涯と哲学形成の概要を述べる。著者はここで、従来の李退溪理気説の解釈に関して、彼が理に動静を認めたとすること、気よりも理を偏重して主理説を主唱したとすること、理は気に先在するとしたこと、理気は互発するとしたこと等々をめぐって様々な異説が存在し、明快な解釈が確立されていないこと、また性情論については、彼の思想を支える重要な概念である「別発」「所從來」「理の顕隠」「互発」等の理解について、これを誤解し、或いは全く言及せずして彼の性情論を解釈しているとし、これら従来の理気・性情論に関する李退溪哲学の理解は、彼の真意に違うものであることを指摘する。

そこで著者は、本研究を進めるに当たって、李退溪思想解明のための三つの具体的視点を設定す

る。即ち、(1)「天下未有无理之氣、亦未有无氣之理」をもって理気共存による万物存立の命題とし、(2)「不容無別觀」をもって認識の基本命題とする。ここでの「別」は他者との比較ではなく、一対象の二つの側面、即ち存在と機能の意味とし、これによって李退溪がすべての認識対象は「不容無別」に思惟し把握せよとしているとし、(3)「動静者氣也」をもって善悪の基準となし、理は共存の気のため、交互の顯隱が常であって、理顯を善、理隱を悪とする互発の論理がここにあるという。上篇理気説は8章に分けて論ずる。著者はまず李退溪の世界観は理気二元論によって成立し、その端的な表現が「天下未有无理之氣、亦未有无氣之理」であり、理気説に関する彼の表現は多様であるが、この命題が終始一貫していることを論証する。彼の理気説が天下に公知されたのは、鄭子雲初作の『天命図説』の改訂を彼が行い、その最も独自の思想がそこに表明された時期という。即ち、宇宙（世界）の生成変化の図式は、従来『河図洛初』から『太極図説』に至るまで、タテ系列で示されたが、『天命図説』は、これらの思想を採り入れたとしつつも実際はひとつの円によって作図され、その「説」の思想内容も異っている。著者は『太極図説』と『天命図説』の成立と思想内容等を詳細に分析し比較検討する。両者の相異は「生成」の見方によるもので、前者は万物が何処から生ずるかその発源をみる立場であるに対し、後者は万物の構成に重点を置き、従って構成原理としての理と気の機能面を表現しようとするから、当然円にならざるを得ないとし、かくの如く同一原理に立ちつつ二種の図が可能であるのは、一原理に二側面の視点が成り立つからであり、その基づく理論的根拠を、著者は、李退溪の「不容無別觀」の思想によるものとし、以上の比較検討を詳細に論じている。

著者は次に李退溪の「理気不可分」の思想を詳細に検討し、ここでも李退溪は「不容無別觀」に基づき、理気「不可分」に存在（同時的）と機能（繼起的）の二側面のあることを説いたものと解釈し、理気の在り方即ち存在については「未嘗離」「不相雜」「無偏」の三定則から説明され、機能的側面は「同中異」「異中同」によって説明されていることを論述する。そして、朱子が存在論的側面に重点を置いたのに対して、李退溪は存在と機能両側面から説いていると解し、そこに李退溪思想の独自性を認める。さらに著者は、この「不可分」の両面性は、歴史的に様々に解釈されてきた『太極図説』の「太極動而生陽」の理解についても適用され得るとし、李退溪の「造化」の概念をとりあげ、彼はこれによって、この難問を解決したことを論証する。

さらに著者は、李退溪がこの「不容無別觀」によって、独自の「体用活看」論を提示していることを明らかにする。即ち、一般に「体」は根源的・一次的、「用」は派生的・二次的であるが、彼はこの固定観を変えて交互に体用を運用し、認識主体が任意に視点ないし重点をとって「体」とし「用」とする体用論を確立したとし、これを「活看」ないし「随处活看」法と解し、この根拠も「不容無別觀」で、その最初の成果が『天命図説』だと論ずる。

最後に著者は李退溪が理に能動力を認めたことを論ずるが、著者によれば、理に対する李退溪思想の発展に3段階あるとし、彼は初期から理を「故」「則」としながらも明確に理の能動力を認めなかったが、晩年に至ってこれを修正し、初めて理に「能発」「能生」「至妙之用」なる能動

力を認めたことを、年次的経過と修正の経緯を含めて詳論する。

下篇は性情論について、奇高峰とのいわゆる四端七情論争の経過と論弁内容を中心に参察する。著者は、退溪・高峰両者の四端七情論争の発端から終末まで6章を費してその全体を詳細に分析考察し、李退溪の主張態度が終始一貫不変であったこと、論弁の進展によって若干の表現が変えられたにしても思想上の本旨を変えたものでないこと、従って例えば、「四端理之発、七情氣之発」を第二答書において「氣隨之」「理乘之」の6字を加えたのは、当初の所説を変えたものとの従来の理解は誤りで、理氣の関係は相待・相成・未嘗離と表現が多様であってもそれが理氣不可分共存の論理に何らの変更がないと同様であると論じている。著者によれば、李退溪の性情論は、存在から価値への論理的展開によって構成されており、善悪の価値判断は「互発」を基準としてなされることを特長とし、その典型的な例を「四端理之発、七情氣之発」に見ることができるという。即ち、四端が存在である限り、万物存在の命題から、四端は理と気によって存在する。それが「理之発」で善とされるのは、動静の気によって理が顕隠され、主理、主氣と互発されるうちに理が顕われ、従って善の判断が成り立つこと、七情は理が隠されて主氣であるが、善悪は未定で直ちに悪ではないと解する。

さらに著者は、李退溪の性情論の帰するところは心の問題であるとして、詳細に「心兼現氣、統性情」を中心に心の性格・役割を考察したのち、李退溪における情の根源と構成について、それが独自の新説によることを論証する。即ち、情の構成は2つの根源によるもので、内の性より発するものを「性発」、外物によるものを「外触」とし、この根源より情が構成される経路を「所從來」といい、「性発」の「所從來」が四端、「外触」の「所從來」が七情であると解し、「均是情」は四端七情をもって構成内容と考えたと解すべきであると提唱する。そして、かかる性情論を説いたのも、結局は李退溪が晩年に至って理の性格に「能発、能性」「至妙の用」を定着させたことによるものと総合的に論述する。

審 査 の 要 旨

李退溪は、朱子学（心儒学）を最も正統に受容した朝鮮朝前期の大儒で、韓国では多くの研究者によって、主として性理学ないし理氣哲学の立場から研究されてきた。朱子学と同様、彼の理氣説や性情論も甚だ難解で、その解釈も多様である。しかも、この面における専論のまとまった著作はいまだみられない。

然るところ、本論文は、李退溪の理氣・性情論に真正面から取り組み、従来の解釈の誤謬や欠陥を指摘してこれを訂正し、独自の方法的視点を設定して、李退溪所説の斉合成や妥当性を論理的に考察し、さらに従来の李退溪理氣哲学の研究における部分的論及を脱却し、その全体を見直して再構成したもので、かかる研究は内外に未だその例を見ることなく、学界に貢献するとこ

ろが大であると認められる。

具体的には、〔要旨〕冒頭に述べたように、著者は、退溪思想の全体を解明するための3つの視点を、彼の所説の中から導き出し、この視点によって、彼の理気説・性情論を一貫して整理・再検討し、随所に新しい解釈を施し、従来異論の多かった部分を斉合的・妥当的に明快に解釈し直し、かつ旧説の誤謬や欠陥を指摘し、訂正のための詳細な論証を行っている。特に『太極図説』と『天命図説』の周到・詳細な分析検討による比較論的考察は、両者の異同と李退溪所説の独自性を闡明したこと、晩年における理の能動説を、立論の動機・経過・内容面から詳細に論証としたこと、性情論における四端・七情を「性発」と「外触」の「所従来」の相異によるものと明快に説明したこと、その他、上記3つの視点から、従来注目されなかった体用に関する「随所活看」論や「太極動而生陽」の新解釈、及び「懸吐」と訓読（日本式の）の比較研究、等々は特に注目すべき学術的成果である。

しかし他方において、李退溪晩年の理能動説（「理不到」から「理自到」へ）をいかに評価するか、及びそれともなう人間主体の捉え方の変換があったとみられるが、それと性情論とはいかに関係しているのか、奇高峰との四七論弁を中心にして性情論を考察しているが、それに含まれない李退溪所説をいかに位置づけるか、これらの問題は、『聖学十図』の考察を通して体系的に再検討され位置づけられるべきものである。また「敬」の思想は、李退溪哲学において最も重視し特長とさるべきものであるが、これについての考察が十分になされていない。これらの諸点は、著者の今後の研究にまつところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体として李退溪関係資料を精察し、従来採用されていなかったものも含めて重要な用語・概念を網羅的にとり上げて系統的に考察し、李退溪思想の再構成を行い、特に難解な理気・性情論の理解を平明ならしめようとした努力と成果は、学界に貢献するところ少からず評価すべきものと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。